

にしてみました。一人の芸術家は最近皇族の前で演奏したそうで、デュッセルドルフのロベルト・シューマン記念祭に出場しています。少しずつこの日本との関係を強化していきたいと思っています。日本でよきパートナーを探して、適切な状況に合わせてドイツの芸術家を日本に送り、また逆に日本の芸術家にもこちらで演奏する機会を与えて、交流を促進できればいいですね。

— ドイツ側では、主として若い芸術家を打ち出しているのですか？

ええ、そうです。学生時代に奨学金を出し、演奏の機会を与え、国際コンクールへの道を切り開いた人たちが、成功しました。例えば、ライプツィヒ放送交響楽団第一コンサートマスター、ヴァルトラウト・ヴェヒター、スイスにも留学したヴァイオリニスト、ジルビア・フィアテル、優秀なパガニーニ奏者、コンラート・ムックなど……長いリストを上げることができますよ。

— この才能のある若い芸術家たちが、まもなく日本でも演奏できることを望んでいます。ありがとうございます。

(一九九一年七月二十五日)

シュトゥルマー・アレックス・エリカ

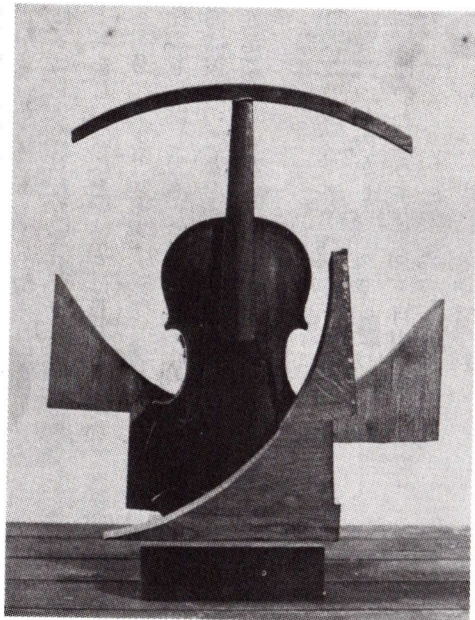
画家・彫刻家・版画家

シュトゥルマー・アレックス・エリカは、画家、彫刻家、版画家として、さまざまな素材を使って芸術活動を営んでいます。私は、エリカとは学生時代に知りあいました。彼女が、日本の古典音楽と演劇に関心を持っていたからです。以来、私は友人としての彼女から造形美術に関する多くのことを学んできました。エリカが、フランクフルト／オーデルから約二十キロメートル離れたところに古くからの広い牧羊場を買ったのは、すでに一九八二年のことです。田舎に引越して、マルク・ブランドンブルクの静けさのなかで、芸術的理念を表現することになりました。創作は、多方面にわたっています。壁画、版画、版画、コラージュ、素材彫刻、彩色プラスチック彫刻、そして建築とも関連しています。国内外の展示会のリストを見れば、数ページに及ぶことでしょう。エリカは一九三八年ブリーツェンで生まれ、一九五八年から一九六三年までベルリン・ヴァイセンゼーの芸術大学に学びました。

(ベアータ・ウェーバー)

— 最近はどうな仕事をてがけたの？

西ベルリンの芸術センターで、「真中から外へ」というマルチ・メディア展示会があつてね。「家父長制の構造とフェミニズム」というテーマで、東西ドイツとオーストラリアの女性芸術家が作品を展示したの。私の彫刻は、おかしな偶然から出来たのよ。或る日、寂しげな森を歩いていたら、閉鎖された空の兵舎に行き当たった。そこには誰もいなくて、地べたに投げ捨てられた軍服、鉄のヘルメット、マルクス・レーニン主義の教科書が山のよ



テレマンの音楽にむけて 一九八五年 (57×19×46cm) 木製

うに散らばっていた。私はトラバントに積めるだけ、持って帰って、軍服を石膏で固め、展示会では、それを石板として天井からつるしたわ。軍服は、私にとって家父長制の構造の象徴ともいえるべきもののなの。

— 変革以来、あなたにとって何が変わったのかしら？

今は、自分が見たいと思う芸術を見られ、聞きたい音楽が聞けて、映画も見られる。友達を皆訪ねることができ、前に壁があつた場所を通るたびに、「ああ壁がなくなつて、本当によかった」と思い、喜びに浸るわね。昔からの友達との友情は変わらないし、嬉しいことに、沢山の西の新しい人たちと知り合いになった。彼らの抱えている問題だって、私たちの問題とたいして変わらないのよ。

— でも多くの芸術家たちは、突然の物質的不安定を嘆いているわね。

このような職業を決断したのならば、定収入がないことは、最初からわかっていることよ。それを私は若いときに学ばなければならなかった。大学卒業後二年は何の仕事もなくて、借金で生活しなければならなくてね。私はいつも出来るかぎり、母にも国にも依存しないように

しい。

努めてきたの。なぜなら不愉快な見返りを要求されることが多いから。もつとも他人は別な生き方をしていたわね。コトブスである展示会があったとき、一人の芸術家と話をしたけれど、彼女はDDRの時代、芸術家同盟から自分のアトリエをもらって、そのための賃料は払わず、仕事も世話してもらっていたのよ。もちろん今では、世間は彼女のことを知らないけれど。いかなる腐敗がここ起こっていたか、実際信じられないほどだわ。

— フランクフルト・オーデルでは、例えばベルリンと違ったのかしら。フランクフルト・オーデルでは、他のところよりずっと自由だったとか……

— そういうことは言えないわ。構造はどこでも同じだったもの。でもフランクフルトにはあまり芸術家がいなかったから、誰もが仕事の分け前があったわね。ベルリンや他の所では、芸術家同盟の幹部たちがお互いに儲けになりそうな仕事を取り合っていて、局外者は何もありませんでした。私は、特に建築と結びついた芸術に携わったわ。例えば、フランクフルトの商店街とか。でも建築と結びついた芸術の委託など今日ではもうなくなっちゃったわね。

— これからどのような活動をしていくのか聞かせてほ

「リーツェンホーフ」と名付けたこの古い牧羊場には、大きな厩があるの。右手にはいくつものアトリエとグループのための空間、左手には展示会や催しものため大きなホールがあって、家の中には沢山の人が泊まることが出来るわ。

私の友人たちは、グループでここにやってくるのね。例えば音楽家たちが、ここで練習をする。これが私の仕事にインスピレーションを与えるの。私は、大抵音楽のために絵を描くわね。それから、私は、自分のまわりに人が集まっているのが好きなの。この滞在費を出してもらって、農場の費用をカバーしているわ。

あと、新しい「クリエイティブ・センター・リーツェンホーフ」あるいは「創造的に生きることを学ぶ」プロジェクトを考えているのよ。子育てや家事、仕事のストレスがあって、芸術活動とは何の関係もないごく普通の女性たちが来れるような。私たちは、三人でこのプロジェクトに取り組んでいるの。私が引き受けるのは、芸術部門。音楽に従って描き、色をつけて表現する。集中力の訓練としての自然学習ね。ティーネは心理部門、瞑想やトランスアクション分析から生じた訓練を担当する。そしてマルグリットが政策を作るんだけど、これは社会学と呼べるわね。例えば沢山の買物籠の分析をした

り、価格と広告との間の関係について話したり、女性たちにヨーロッパ共同体とは何かを説明するの。これは、新しい時代のポジティブな成果だと私は思う。もうずつと前から望んでいた一つのプロジェクトを実現できる。私の好きなグループや人々が、秘密警察に不信の目で見られることなく、ここにすることが出来るのよ。

— 最近、私は日本人の友達をここに連れてきたとき、彼女はDDRにこのような生活形態があったなんて知らなかったと言ってたわ。

— 私だけのケースではないわよ。きっと私の世代と関係しているんだわ。私たちは理想主義者。芸術史、それも社会主義の芸術史に名を残す名譽心なんか持ち合わせていなかった。持っていたのは、はっきりしたアイデア、芸術的な手段で貢献しようという精神構造のはっきりしたイメージよ。プロセスを進めるために、個人の人格や同時代の芸術家に関心を持たなかった。だから私の作品を自分のための商標として表現するのではなく、多方面にやっていたいわね。それが私の人生観に合っていると思う。

